



ななかまど Vol.35

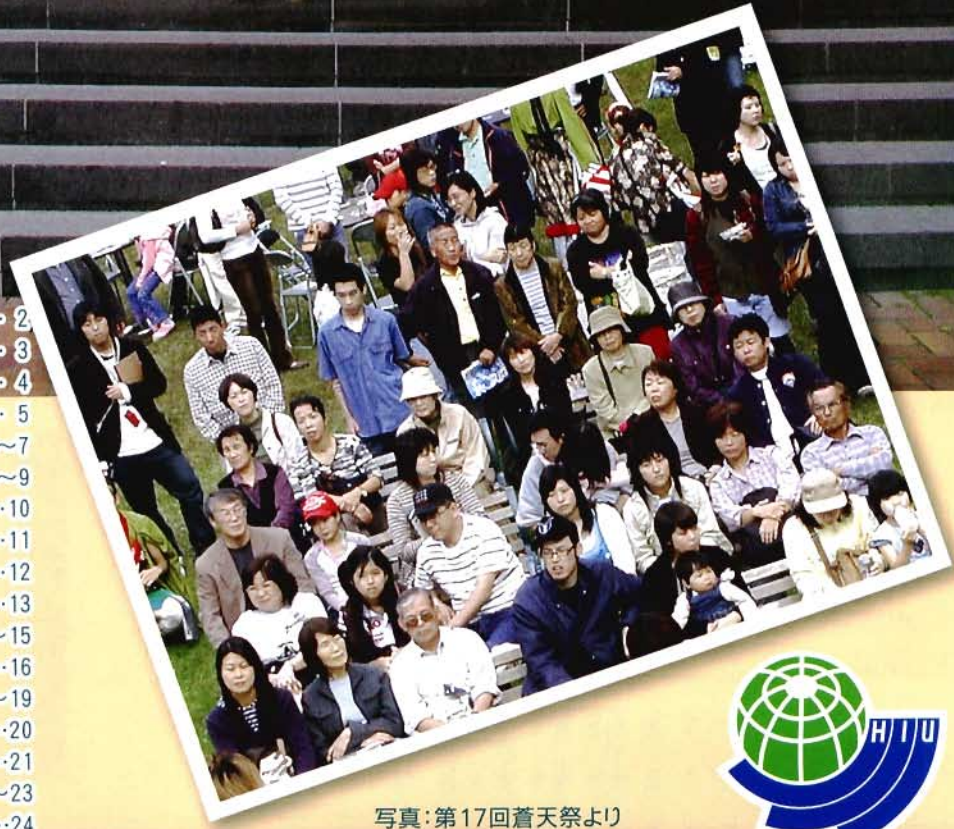
第17回蒼天祭

北海道情報大学松尾記念館

WELCOME TO HIU

蒼天
無限大

大学入試センター試験
受験案内配付場所



写真：第17回蒼天祭より

目次

- 医療情報学科への期待.....2
- 医療情報学科が目指すもの.....3
- 現代GP探択.....4
- 野幌高校高大連携.....5
- 中国南京大学日本文化研修旅行一行来学...6~7
- 国際フォーラム'05開催.....8~9
- 野球試合経過速報システム.....10
- 中学生職場体験.....11
- ものづくりフェスタ.....12
- ピアサポートルーム完成.....13
- 海外短期研修.....14~15
- 蒼天祭を終えて.....16
- 蒼天祭.....17~19
- ゼミ紹介.....20
- クラブ紹介.....21
- 学生サポートセンターより.....22~23
- 主要行事等.....24





医療情報学科への期待

学長 井野 智

少子化と他大学における類似学部等の増設により、本学の学生募集環境は年々きびしくなってきた。この現状に対処するため、平成18年度から本学は、既存3学科の入学定員をそれぞれ縮減し、経営情報学部新たに社会的ニーズの高い「医療情報学科」を設けることになった。

新学科の使命は、少子高齢化の進展に伴う保健・医療・福祉への高いニーズに応え、この分野の量的拡大と質の向上に寄与することである。そのねらいは、医療の特質をよく理解し、最適な情報処理技術に基づき、医療情報を安全かつ有効に活用・提供することのできる知識、技術、資質をかねそなえた医療情報専門職の人材育成にある。

全国で3番目、東京以北では初めての医療情報学科の誕生は、多くの医療機関、全国の高等学校、競合大学などの関心を集めそうである。

他の2大学はいずれも医療系大学であるが、情報系の本学が新学科設置に踏み切れたのは、北海道大学医学部、旭川医科大学および地元江別市立病院から大きな期待が寄せられたうえに、新学科の設置とその後の運営にも協力を惜しまないとの有難い申し出を受けたからである。

情報に軸足を置いた医療情報学科の教育内容等は別記にゆずり、ここでは、新学科への期待をこめて二人の人物を紹介したい。

一人は、薩摩藩軍医として戊辰戦争で見聞した西洋医学に驚き、イギリスに留学して近代医学を修め、海軍病院長、海軍軍医総監となった高木兼寛である。

新学科のカリキュラムの中に「医療統計」という科目名をみつけ、ふと頭にうかんだ小説がある。明治の初期に陸海軍軍人に多発した脚気の原因を解明し、その予防法を確立した高木兼寛の生涯を描いた吉村昭著『白い航跡』である。医療統計を重視する主人公の研究姿勢と情熱を克明に描いた同書を再読し、あらためて医療情報学科の重要性和将来性を確信することができた。

もう一人は、本年3月まで情報メディア学部教授を務められた伊藤佐智子先生である。

先生は、本年度が第5回となる道民カレッジ「大学放送講座」の初年度の講師としてHBCテレビに出演され、医療情報の重要性を広く道民に伝えられた。特に、病気の予防対策を目的とした鷹栖町の「健康管理情報システム」の映像は、今も印象につよく残っている。地域医療システムに含まれるこのようなテーマは、新学科の教育研究の柱となる大切な課題である。

高齢化が進み、わが国の国民医療費が増加し健康保険制度を支える財源の確保が難しくなりつつある今日、医療給付増加の抑制につながる、国民あるいは地域住民の健康づくりは、あらゆる組織、団体が組むべき最優先の課題である。

IT化が進む医療現場はもとより、医療を必要としない病気予防、健康づくりなど、新設の医療情報学科卒業生の活躍の場は広い。人間の命や健康に関わる職業に誇りと責任をもち勉学に勤しむ学生たち、これを真剣に指導する教職員の協同、そんな新学科の熱気が大学全体を活性化する起爆剤となることを期待したい。



医療情報学科が目指すもの

平成18年4月から、経営情報学部にて「医療情報学科」が新設されます。医療分野におけるIT化が急速に進み、最適な情報処理技術に基づく医療情報専門家の養成が医療現場で急務とされているのを受けて、東北・北海道地区では初の学科開設となります。ここでは、この新学科が目指す方向について少し説明します。

現在の医療のIT化、つまり、病院情報システム、電子カルテの管理や運用、的確な手段による医療データ・情報の処理等に対応するためには、専門的な知識が不可欠であり、ITの導入を進めるほど、医療の場では医療情報の専門家が必要となります。

新学科では、現場のニーズに応じ、望ましい医療の実現に貢献するような「医療情報技師」や、「診療情報管理士」等の医療情報の専門家の育成を目指します。「医療情報技師」は、医療の特質をふまえ、最適な情報処理技術に基づき、医療情報を安全かつ有効に活用・提供することを業務とします。「診療情報管理士」は、カルテの管理だけでなく、そこに含まれるデータや情報を加工分析し、医療や健康の質の向上、病院の経営管理に係る業務も行えます。

新学科の教養教育では、「人間力」、すなわち、自分の専門領域を広い視野から客観的に眺め、人生や社会における意味について考察できる“力”を備えることを目標とし、専門教育では、教養教育を基礎として、医療情報に関わる各専門分野の知識・技術を修得することを目標とします。1年次のビギナーズセミナーから始まり、演習、専門ゼミナール、卒業研究を通じ、知識のみならず技術、応用能力に加え幅広い人間性を身につけます。

なお、「医療情報学」は、3つの領域（「医療情報システム」、「医学・医療」、「情報」）から構成されています。これら3領域に沿って展開される専門の授業科目は、医学・医療領域では、「医療



制度」、「臨床医学」、「基礎医学」の基本科目等、医療情報システム領域では医療のIT化に対応した「電子カルテ」、「レセプトシステム」、「オーダリングシステム」等、また情報領域では情報に強いという本学の特質を活かし、「システム構築」、「ネットワーク」、「データベース」、「情報セキュリティ」等をコア科目として設定しています。これらを学習することで、医療情報の安全な公開と提供が可能なスキルを身につけることができ、また経営を学習することで病院マネジメントへの参加も可能となります。

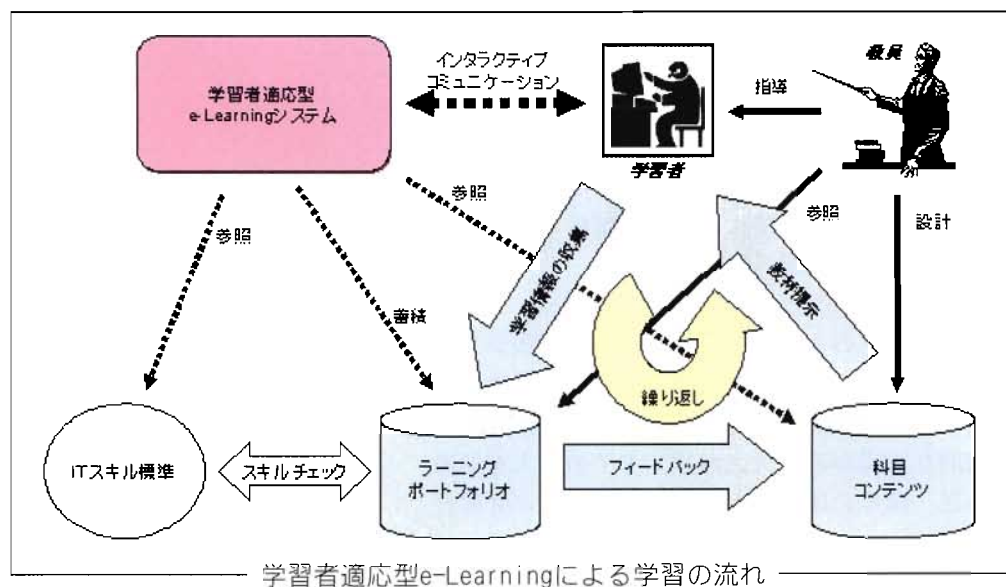
卒業後は、将来的に病院マネジメントのできる医療事務職員や診療情報管理士あるいは医療情報技師として、医療機関に就職することを目指します。それ以外にも、医療サービス機関、看護福祉機関、保健所、地方自治体、IT産業等、幅広い就職先を視野に入れます。平成13年12月、厚生労働省の「保健医療分野の情報化に向けてのグランドデザイン」が示されたことにより、電子カルテシステムを導入する病院が増えてきているうえ、平成15年度より医療情報技師の資格試験が発足し、今後は病院に勤務する情報処理技術者の増加が予測されます。

医療情報学科の開設は、医療分野におけるIT化が急速に進む中で、充実したカリキュラムと教育システム、信頼性のある資格の設定、徹底した就職サポート体制の整備により、地元をはじめとする関係機関から強い期待が寄せられています。

（総務課）

平成17年度 現代GP採択される

文部科学省が選定する平成17年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)」に、本学が申請した「ITによるIT人材育成フレームの構築—学習者適応型e-Learningシステムの開発—」が、選定率約16%という難関を突破し、86件の中から採択されました。



現代GPは、社会的要請の強い政策課題に対応した、21世紀型の優れた教育を行っている大学等を公募・選定し、予算を重点的に配分するというもので、昨年度より開始されています。今年度は、国公立の大学・短期大学等から509件の申請があり、6つのテーマで84件が選定され、本学はテーマ6の「ニーズに基づく人材育成を目指したe-Learning programの開発」に申請しました。

これは、本学の取り組みが、①社会的要請の強い政策課題に対応した特に優れたものであるということ、②今後に向けた確実な計画のもとに



説明を行う富士教授

新たな教育改革を図るものであるということが認められた結果です。

また、9月22日(木)午後6時から、校舎棟2号館の116教室において教職員を対象とした現代GP採択の説明会が行われ、プロジェクトマネージャである井野 学長の挨拶の後、プロジェクトリーダーである富士 教授から概要説明が行われました。

(総務課)

説明会の様子



◇現代GPについての詳細は、文部科学省のホームページ (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/17/08/05080601.htm) をご覧ください。

◇本学の取り組みについての詳細は、本学のホームページ (<http://www.do-johodai.ac.jp/topics/data/20050806gendaigp/Gendaigp.pdf>) でご覧いただけます。

北海道野幌高等学校と本学との 高大連携協定調印式行われる

教務課長 加藤 邦雄

平成17年11月1日(火)午前11時から、松尾記念館3階会場において、北海道野幌高等学校と本学との高大連携協定調印式が行われました。
式には、両校から7名ずつ出席し、開式後、井

野学長、佐々木校長から挨拶があり、続いて、学長、校長が調印用のテーブルに移って協定書に署名し、その協定書を両者が交換して無事式が終了しました。



調印式の模様

◆出席者◆

☆本 学

- ・学 長 井野 智
- ・高大連携委員長 嘉数 侑昇(副学長)
- ・高大連携副委員長 石井 勝
(情報メディア学部 助教授)
- ・経営情報学部長 林 雄二(教務委員長)
- ・事務局長 中居 聰士
- ・事務局次長 吉田 嗣治
- ・教務課長 加藤 邦雄

☆北海道野幌高等学校

- ・校 長 佐々木美喜雄
- ・教 頭 堺 俊光
- ・事 務 長 桜庭 勝己
- ・総務部長 長尾 亨
- ・進路指導部長 古田 浩
- ・2学年主任 近嵐 成幸
- ・教務部長 山下 修一

◆協定書締結に到るまでの経緯◆

今年4月に井野学長、嘉数副学長及び中居事務局長が野幌高校を訪問した際、佐々木校長との間で高大連携の話がもちあがりました。その後、野幌高校からこの連携教育を早期に実現させたい旨の申し出があり、6月27日(月)、佐々木校長、堺教頭ほか4名の方が本学に來られて、学長、副学長はじめ本学の関係者との間で高大連携に関する具体的な話し合いが行われました。

9月以降、実務レベルでの打合せが始まり、3回程協議を重ねた結果、協定締結に向けた話が急ピッチで進み、11月1日(火)に調印式を行うこと

となった次第です。

今回締結した高大連携の大きな特徴は、本学が高校生に対して単位を認定するという点です。具体的には、野幌高校3年生のうち、本学への関心の高い生徒が本学に來て1年生の授業科目を受講し、本学学生と同じ評価を受け、担当教員が修得を認めた場合には単位を認定する。さらに、この修得した単位については、当該生徒が本学に入学した際に既修得単位として認めることとしており、他にあまり例のない一歩進んだ高大連携であると言えます。

中国南京大学からの 日本文化研修旅行一行来学

総務課 係長 吉村 美穂

平成17年7月6日(水)～16日(土)の11日間、中国南京大学から、日本文化研修旅行の一行が来日しました。実は、南京大学が研修旅行で学生を海外に派遣するのは今回が初めての試みとのことで、世界180以上の大学と国際交流協定を結んでいる南京大学が、このパイロット事業の受け入れ校として本学を選んだことは、本学と南京大学の結びつきの深さを示すものといえるでしょう。

来日したのは、学生19名・引率教職員3名の計22名で、学生は南京大学の全学から参加しています。

一行は6日、千歳空港から入国しました。初日は、そのまま日本でも屈指の透明度を誇る、風光明媚な湖、支笏湖の見学を経て札幌市中央区円山西町の産業技術教育訓練センターへ投宿しました。

翌日は本学で、井野学長の表敬訪問、キャンパス見学など、スケジュールをこなしました。本学の見学では参加学生はコンピュータ機器の充実を目をみはり、引率教職員は機材の管理体制に興味

を持ったようです。午後は札幌へ移動し、北海道大学を視察しました。ここでは、まず総合博物館でマンモスの臀部(本物)を見学し、次いで低温科学研究所でマイナス50度の部屋を体験し、南極の氷(実物)を見せていただきました。

3日目は午前中、札幌市内見学に出かけました。大倉山ジャンプ競技場や札幌ウィンタースポーツミュージアムを見学。雪のあまり降らない南京市からの学生たちは、ジャンプをはじめとするウィンタースポーツに興味を惹かれたようです。午後は、小樽見学です。南京市は内陸のため、海を見たことのない学生がほとんどのためか、海と運河の町小樽を堪能したようです。

4日目は、北海道開拓記念館で「北海道文化講習」と題して、学芸員の方にアイヌ民族の文化・歴史を中心に北海道の歴史を講義していただきました。講義終了後は、学芸員の方に当時のロシアと北海道の関係について質問するなど、北海道への理解を深めたようです。終了後はバスで美瑛・

富良野方面へ移動です。

7月上旬は北海道のラベンダーのベストシーズンで、ラベンダー畑で有名な富良野のファーム富田は、大雪山系をバックにすばらしい景観でした。この日からの宿舎は上川郡美瑛町の大雪山青年の家で、ここでの食事がおいしいと学生たちに評判でした。

5日目は旭岳の姿見の池付近をハイキングです。残雪が残り噴煙をあげる旭岳は、学生たちに強烈な印象を残したようで、最終日に記入してもらったアンケートにも一番印象に残ったところとして、多くの学生が旭岳をあげ



本学松尾記念館前



ていました。

6日目は、今や行動展示で全国的に有名な旭川市の旭山動物園の見学に向かいました。ダイナミックなダイビングの水中シーンが見られる「しろくま館」や、遊泳する姿を下から見上げることのできる「べんぎん館」、十数メートルの高さに渡したロープを渡るのが見物の「おらんうーたん館」など、見応え十分でした。この日は美瑛のPATCHワークの丘を鑑賞し、さらに男子学生は吹上公園で屋外露天風呂を、女子学生は温泉施設での露天風呂を体験し、宿舎に戻りました。

7日目は北海道から東京へ移動です。東京では、まずお台場を見学し、夜は東京タワーからの夜景見物に出かけました。東京タワーでは、圧倒的な明るさの東京の夜景に、皆驚いていたようです。東京での宿舎は渋谷区代々木神園町の国立オリンピック記念青少年総合センターで、タタミ部屋で布団を敷いて寝る、という日本文化体験にもなりました。

翌日の8日目は電子開発学園本部で松尾理事長の表敬訪問が行われました。理事長へ参加学生一人ひとりが挨拶し、中には独学で学習したという流ちょうな日本語で話す学生もいて、皆を驚かせていました。こ

の日の午後は東京大学と上野国立科学博物館を見学です。東京大学では学食も体験しましたが、多くの学生が中華料理を選んでいました…。

9日目は皇居を見学後、江戸東京博物館へ向かいました。この博物館は模型など見て楽しむことのできる展示が充実しているせいか、学生達も興味を持ったようです。その後秋葉原へ行き、男子学生を中心にショッピングに突入。ゲーム機、MP3、デジカメ等お目当てのものをそれぞれ入手したようです。

10日目の午前中は、鎌倉に向かい、大仏殿と鶴岡八幡宮を見学しました。日本の歴史的建造物には、多くの学生が興味

をひかれたようでした。午後は横浜まで戻り、山下公園を中心に散策を楽しみました。そして、最終日は成田から帰国し、無事11日間の研修旅行を終えました。

今回の研修旅行では、参加した全ての学生から満足したとの評価をいただきました。近い将来、中国の様々な分野で彼等がリーダーになるでしょう。実際に日本を見て、日本を理解してもらいたい機会となるこのような研修旅行を今後も実施できればと思います。



理事長表敬訪問

国際フォーラム'05 開催

平成17年10月14日(金)・15日(土)の2日間に渡って、北海道情報大学 国際フォーラム'05 - I T人材育成をめぐる - が開催されました。本学で初めての国際フォーラム開催とあって、準備から実施まで、全学あげての対応となりました。また、このフォーラムに参加したのは、北海道情報大学、中国南京大学、アメリカカリフォルニア大学サンタクルーズ校の3大学で、今後の3大学協同へ向けた最初の一歩を記すものとなったといえるでしょう。

1日目の14日は、松尾記念館講堂において井野学長の挨拶に始まり、基調講演、市民フォーラムに続いて、場所を移してレセプションパーティが行われました。基調講演の一人目は、南京大学 科学計算機と技術学部長 陳道蕃先生です。タイトルは「中国の大学におけるコンピュータ専門教育の社会ニーズへの順応」。中国語での講演で、中国での国家政策としてのコンピュータ教育のこれまでと現状、さらには将来展望につ



会場の様子

いて話されました。続いて二人目は、カリフォルニア大学サンタクルーズ校 工学部長 Sung-Mo S. Kang先生で、タイトルは「I T教育と研究の将来」。アメリカ政府のI T政策について触れ、I T人材の将来展望、I T産業と学問分野との連携等について英語での講演でした。三人目は本学 副学長 嘉数侑昇先生です。タイトルは「日本におけるI T人材育成へのアプローチ」。日本で提唱されているe-Japan戦略や日本でのI T技術者の人材不足に関する問題を通して、I T人材育成のための提案などについての話でした。

続いてコーヒープレイクをはさんで、市民フォーラムが行われました。ここでは最初にカリフォルニア大学サンタクルーズ校 工学部教授のIra Pohl先生から「21世紀のプログラミング」と題して英語での講演がありました。これまでのコンピュータ言語の歴史から今後のコンピュータ言語やプログラミングの展望についての内容でした。市民フォーラムの二人目は南京大学 科



基調講演の講演者

学計算機と技術学部教授 潘金貴先生で、タイトルは「中国ソフトウェア産業の概況および課題」です。潘先生は中国のソフトウェア産業の位置づけ、規模等の現状とそれに続く今後の課題について、中国語で講演されました。

その後、場所を移してレセプションパーティが行われました。井野学長の挨拶、来賓を代表して小川江別市長の挨拶の後、嘉数副学長の乾杯が行われました。続いて翌日のパネルディスカッションの講演者を含めた各講演者の方の紹介が行われました。講演者の方には一言ずつご挨拶いただき、2日目への期待もふくらみます。最後は中居常務理事の挨拶で〆となりました。

2日目の15日は本学の教室でパネルディスカッションが行われました。Ira Pohl先生、陳道蓄先生に続き、東京大学大学院の大場善次郎先生、北



海道大学大学院助教授の畠山康博先生、本学教授の前田隆先生がパネリストとなり、コーディネーターは本学の嘉数副学長がつとめました。ディスカッションの最後には一般の方からの質疑もあり、充実した時間となりました。

今回講演していただいた先生はいずれも、それぞれの国でトップクラスの方々です。学生のレポートからは、通訳が無かったにもかかわらず、感銘を受け自分の将来の展望を見直したとの記述があり、本物に触れることの大切さを再確認させられました。また、参加してくださった海外からの招待者の方からは次回は中国やアメリカで開催しようとのご提案もいただき、実りある国際交流に向けて、また一歩前進したといえるフォーラムとなりました。

(総務課)

北海道情報大学 国際フォーラム'05

テーマ：IT人材育成をめぐる

開催期間：2005年10月14日(金)・15日(土)

- 10月14日(金)
 - 国際フォーラム 13時00～15時30
 - 市長フォーラム 16時00～17時30
- 10月15日(土)
 - パネルディスカッション 10時00～12時00

主催：北海道情報大学
 協賛：東京大学/University of California, Santa Cruz校
 後援：江別市/江別市教育委員会/江別商工会議所/情報処理学会北海道支部
 〒069-8545 北海道江別市西野橋 59-2

論文集表紙

3カ国語で作成されたリーフレット

野球試合経過速報システム「すこるぼ」

北海道情報大学スポーツ情報研究室 井野 智

たとえば、北海道情報大学の硬式野球部が全日本大学野球選手権大会に出場したとします。もちろん、テレビやラジオの中継はありません。このような時、せめて得点経過だけでも知りたいと思いませんか。たとえ、授業中であっても。

この夏、全日本大学準硬式野球連盟が主催する二つの全国大会で、本学のスポーツ情報研究室が開発した野球試合経過速報システム「すこるぼ」が採用されました。「すこるぼ」は得点板score boardをイメージした愛称、システムは谷川 健助教授と金 義鎮助教授と私の3人が協力して開発にあたりました。

システムの使い方はきわめて簡単です。

データの入力は球場ネット裏の役員が携帯電話で行います。

試合前に大会名、先攻のチーム名、後攻のチーム名を選択し、あとは得点経過を入力するだけです。入力形式は「△*□」または「△#□」のいずれか、△は回数、*は表、#は裏、□は得点を表わします。たとえば、7回裏一挙3得点では「7#3」、さらに1点追加は「7#4」と入力します。

全国どこにいても、携帯電話あるいはパソコンで「すこるぼ」にアクセスし、大会名とチーム名を選択すると、試合中の得点経過や試合結果を閲覧できます。

本システム初の運用は8月中旬、岡山、倉敷両市で開かれた全日本大学準硬式野球選手権大会、次が8月中旬、金沢市で開かれた清瀬杯全日本大学選抜準硬式野球大会でした。

システムの完成が遅れたため、全国大会における「すこるぼ」使用とそのURLの公表は、大会直前の主将会議でのアナウンスと、連盟公式サイト(<http://www.junnkoh.jp/jba/>)上だけでしたが、予想をはるかに超える多くのアクセスがありました。

大会期間中だけでも、25チームが出場した選手

権大会で約38,000件、16チームが出場した選抜大会で約13,000のアクセスがありました。

誰が、どのような目的で「すこるぼ」を閲覧したかは不明ですが、利用者としては、①他球場の試合経過を把握したい大会役員、②明日の対戦相手を知りたい監督・選手・マネージャー、③試合経過が気になりな選手の家族・友人・先輩たち、④地域代表の活躍に関心をもつ加盟校の選手たち、⑤出場チームの勝ち負けが仕事に直結する各業者、などが考えられます。

「すこるぼ」はいたって好評、とくに、50人近い大きな団体客を扱うホテルや旅行業者にとって、今晚と明朝の食事が要るかどうか、明日以降の予約を入れられるかどうか、明日の航空券を確保するかどうか、といった

判断には「すこぶる」役立ったようです。

本システムについては、北海道の財界誌に掲載されましたし、全日本大学準硬式野球連盟の機関誌 out & safe にも取り上げられる予定ですので、来年度以降のアクセス件数はもっと増えることでしょう。

本学の硬式野球部が所属する札幌学生野球連盟でも、秋季リーグ戦から「すこるぼ」を採用しています。アクセスすると必ず目に入る「北海道情報大学スポーツ情報研究室」、本学の知名度を上げるのに少しでも役立てば幸いです。

全日本大学準硬式野球連盟 大会情報提供サービス

大会名: 第57回全日本選手権大会 ▼
大学選択: 第57回全日本選手権大会
全試合結果: 清瀬杯第37回大会

開発・提供
北海道情報大学
スポーツ情報研究室



中学生職場体験

平成17年8月29日(月)から9月2日(金)の5日間、江別市立中央中学校から4名(男子2名、女子2名)の生徒が本学で「職場体験」をしました。

この「職場体験」は、江別市教育委員会が以前

より児童一人ひとりの勤労観、職業観を育てるための取り組みとして実施している「職業訪問」を一步進めた対策として、平成17年度において文部科学省の指定を受けた、連続5日間、同一事業所において職場体験することにより、働くことへの関心、意欲の高揚や自立意識の涵養を目指す「キャリア教育実践プロジェクト」の一環で行われたものです。

これは、近年、社会的にも話題となっているNEET*(ニート；教育、雇用、職業訓練のいずれもうけない、つかない)と呼ばれる若者が全国に52万人以上になるとも言われている現状から、職業観の醸成が必要とされているため実施していると伺っています。

4名の生徒は、今までにアルバイト等で働くという経験はなく、5日間を緊張した面持ちで、総務課、学生サポートセンター事務室、図書館、通信教育部事務部、企画調査室の5つの部署を日替わりで体験しました。

各部署での仕事内容は様々ですが、郵便物の仕分け、書架整理、データ入力、郵送準備等を体験しました。

職場体験の日程が無事終了した後、4名の生徒全員からお礼のお手紙が届きましたので、その一通をご紹介します。

(総務課)

拝啓

先日は大変お忙しい中、私たちのためにいろいろとお世話いただきありがとうございます。

初めての事務の仕事は何をしていいのかもわからず、最初はとまどったこともありましたが、担当の方にいろいろと親切に教えていただき、とてもわかりやすく、勉強になりました。3日目には、研究所へつれて行っていただいて、今まで体験したことのないことをたくさん体験することができました。

この職場体験で、仕事をする大変さや、楽しさなど、たくさんのことを学ぶことができました。この体験をこれからに生かしていきます。

まだまだ暑い日が続きますが、体に気を付けて、これからもお仕事頑張ってください。

敬具

通信教育部事務部での郵送準備



図書館での雑誌受け入れ作業

*NEETとはNot in Employment, Education or Trainingの略。

えべつものづくりフェスタ2005に参加

法人本部 企画調査室 吉村 美穂

「えべつものづくりフェスタ2005」が平成17年9月17日(土)、ほくでん総合研究所で開催されました。これは、江別市の産業界、大学、市などが協力して江別市民が参加するイベントを実施しようと、ほくでん総合研究所がもともと行っていた施設の一般開放に合わせて行われるようになったもので、今年で6回目を数えます。参加している団体には、江別市、北海道電力株式会社をはじめ、本学を含む江別市内4大学、産業界からはラーメンの株式会社菊水、カスケードガレージの株式会社日江金属、江別の麦で脚光を浴びている江別製粉株式会社、さらにはテレビの某料理番組でも紹介されたことのあるベーコンがおいしい有限会社トンデンファームなどの地元企業が連なり、毎年2,000人ほどの市民が来場します。

今年の本学の出し物は「デジカメで顔写真入り



うちわを作ろう。毎年、デジカメで顔写真を撮影し、何かにプリントして配るとい

にっこり笑って写真撮影

う展内容で行ってききましたが、今年はそれをウチワに印刷することにしました。まず、大学で用意した12種類のフレームのうち、好きなフレームを来場者を選んでいただきます。次に顔写真を撮影し、コンピュータを使って、あらかじめ選んだフレームに写した写真をはめ込んで専用用紙に印刷します。最後に団扇の骨にその用紙を貼って完成です。フレームの一番人気はなんと言ってもムシキングのフレームで、男の子に絶大な人気を誇っていました。来場者は親子連れが多く、子供の成長記念に、毎年訪れてくれるリピーターの方もいて、スタッフも楽しいひとときを過ごしました。また、今年は江別市の小川市長も来場し、流星のフレームでう



ちわをお作りいただきました。

ところで、毎年、各団体が力を入れているイベントだけあって、昨年は15分で終了してしまった整理券の配布に、今年は40分かかりました。例年、このイベントでは江別市内4大学のうち、本学が一番の集客を誇ってきたのですが、今年は向かい合った会場で集客を競い合った札幌学院大学という勝負となりました。来年に向けて、闘志がわいてきた今年のものづくりフェスタとなりました。

会場のほくでん総合研究所



僕にも貼れるかな

学生による学生相談室 《ピアサポート・ルーム》の開設について

9月26日から学生による学生相談室《ピアサポート・ルーム》が開設されました。

本学に“学生相談”ということでは『(教員による)学生相談室』や『オフィス・アワー制度—教員が研究室に必ず待機している時間帯を決め、学生の質問や相談に応じる—』が設けられていますが、このたび“同じ情報大生の目線から”という視点で設置されたのがこの学生相談室です。この相談室について簡単に紹介します。

◆場所：本部棟3階…学生サポートセンター前の階段を利用して3階のすぐ前

◆相談員(学習アドバイザー)の構成：大学院生3名、両学部生7名

◆相談時間：10:30～15:00

《9月26日～1月16日の後期授業期間》

ただし、授業がない土・日・祝日・冬休みを除く

◆主な相談内容

- 学習の進め方(卒業単位の修得を含む)
- 講義概要、学生便覧の内容等でわからないこと



ピアサポート・ルーム内

- コンピュータやプログラミング等技術面に関すること
- 定期試験等の準備のしかた
- 履修などを中心にした教務関係の取り決め事項(ルール)でわからないこと
- 学業、学生生活に関する各種手続きの相談や窓口について
- etc…

相談者第1号はサポートルーム開設から10日目。それまでに学習アドバイザー(相談員)からは相談者が気軽に相談室に入れるように、室内のレイアウト変更や足りない物品等の補充から学生への周知方法等々、提案を沢山いただいたことが奏功してか、現在では(10月20日現在)1日に2名ぐらいの学生が相談に来るようになりました。

ピアサポート・ルームは同じキャンパスの仲間(=ピア)の手助け(=サポート)をする場所。もちろん秘密(プライバシーに関すること)は厳守されます。

学生による学生のための問題解決の場として定着するよう長い眼で見届けたいものです。

(教務課)



外から見たピアサポート・ルーム

中国短期留学の感想

情報メディア学部 3年 井村ゆかり

一年生の時に履修していたとはいえ、「私の中国語は通じないだろう」という思いを持ち参加した今回の中国短期留学は、台風の影響による飛行機の遅延から、始まりました。最初は上海、蘇州観光の予定でしたが、到着が遅れたこともあって、いきなり南京へ向かうことになりました。

南京は歴史上の問題で、日本人への印象が悪いのではと思っていましたが、嫌がらせなどは一切なく、逆に親切な人が多かったのが、安心しましたが、少し複雑な思いもしました。南京大学での語学研修は、二人の先生が会話と発音練習を丁寧に教えてくれましたが、自分の名前、「私は日本人です」ということさえ中国語で伝えることが出来なくて、「ちゃんと理解出来るようになるのか」という不安を感じました。

南京での生活は、午前が語学研修で、午後は自由というものでした。私は、最初のうちは戸惑ってしまい、午後の時間は部屋にほとんど居ましたが、「動かないと損をする！」と考え直し、ガイドブックを見ながら、観光名所を巡りました。有名な場所のはずなのに、側に高層ビルが並んでい

たりと、ごちゃ混ぜになっているところが不思議でした。

授業を受け、宿題をこなし、南京で生活していくうちに、流暢な会話とまではいきませんでした。買い物で値段が聞き取れるようになりました。自分なりに「少しは成長したのかも」と思いました。やっと慣れてきたという頃に、研修期間は終わりを迎えました。南京を離れる時は、「もう少しここに居たい」という気持ちで、いっぱいでした。

今回の上海、蘇州観光はどうなるのかと思っていましたが、南京滞在中に玉置先生の神通力で、行くことができました。外灘の夜景は、ずっと眺めていたいほど綺麗でした。

研修旅行先の西安と北京は、とても感動しました。特に兵馬俑は、圧巻で言葉がでませんでした。案内してくれたガイドさんも、優しい方で嬉しかったです。韓国人に間違えられたり、カエルを食べたりと、いろんな経験が出来て楽しかったです。今回の留学に、参加することが出来て、本当に良かったです。



北京・天安門広場にて（右から2人目が筆者）

アメリカ体験レポート

情報メディア学部 2年 齊藤 宣和

今、改めてあのアメリカで過ごした一カ月を振り返ってみると、多くの貴重な体験をしたと思います。アメリカで過ごした1日1日がかげがえのない素晴らしい日々でした。私が今回アメリカ行きを決めたのは好奇心からでした。もちろん、語学力のレベルアップ、異文化コミュニケーション、海外生活などを学びたいという気持ちもありましたが、自分の知らない世界に行ってみたいという気持ちが強かったのです。

アメリカの初日は、全てのことが新鮮な驚きの連続だったことを覚えています。人々、気候、雰囲気、車、建物、サイズ、食べ物など、どれも日本と比べて違いの大きさに驚かされました。片手にデジカメを持って歩いて、何かあるとすぐに写すという毎日でした。景色という点ではビーチや夜のボードウォーク、サンフランシスコの町並み、ゴールデンゲート・ブリッジもすばらしかったのですが、ヨセミテ国立公園が最高でした。快晴の中見た広範囲に連なる山脈やマイナスイオンほどばしるヨセミテの滝、夜に見た満天の星空や初めて見た天の川や流れ星などあの純粋な大自然を直接肌で感じとれたのは心に残るものとなりました。私がアメリカで見てきた全ての景色に額縁をかけてあげたいです。

最初、3週間は長いと思ったホームステイでしたが、終わってみればホームステイが一番自分を成長させてくれました。私のホストファミリーはフィリピンから移住してきた美味しい料理を作る母親のメルバ、聞いていておもしろい独特の発音や口癖がある長男のジョセフ、いつも周りを楽しませてくれる日本人留学生の茂樹さん、そしてちょっと太った愛猫のカミュールという一家でした。みんな心優しく接してくれたので私はこの家に気を使わなくてもいいという印象を持つことができました。一緒に生活をしていく中で求められる英語は普段の英語にも役に立ちました。共に生活している中で相手の調子をみたり、自分のしたいことを伝えたり、相手の話を理解する努力はもちろん、何よりも同じ空間で同じ時間を共に過ごしているのだからその時間を最大限に楽しむことを学



右から三人目が筆者

びました。また、ホストファミリーの協力なしでは毎日のプログラムを楽しくこなすことができなかったと思います。そして私は、とても重要なことを学びました。自分の伝えたいことを伝えるだけの行為が、言語一つ違うだけで非常に難しいことです。逆にその分伝わった時にすごく大きな喜びを感じとれました。アメリカでは、話すことよりもどちらかといえばリスニングに苦労しました。しかし、英語を使って生活しているうちになるべくネイティブの人の英語を聞きとれるようになりたいとの一心でコミュニケーションをとるようにしました。そうしているうちに「話す英語」の楽しさというものがわかってきました。

そして私が過ごしたサンタクルーズという町は、アクティビティが盛んな町でした。自由な時間を見つけてはUCSCに行き、サッカーやビーチバレーをして汗を流したり、ボードウォーク遊園地に行ったりして活動的に過ごすことができました。学校が終わった後はダウンタウンに買い物に出かけたり、飲食店で美味しいものや珍しいものを食べて楽しみました。ダウンタウンは本当に居心地の良い庭みたいでした。

今回私がこの留学で出会った全ての人々に感謝したいです。この一カ月間、色々な出会いや発見があり、十分すぎるくらいアメリカを満喫しました。この体験を生かしてこれからも人生を大いに楽しんでいこうと思います。私がアメリカで過ごした日々は、いつまでも私の胸に色植せることなく残っていくでしょう。

蒼天祭を終えて

学生部長 玉置 重俊



本学の蒼天祭は、大学祭実行委員会の学生諸君の献身的なご尽力、および教職員の皆様のご協力のおかげで、十月一日（土）、二日（日）の両日において、立派にそして盛大に開催されました。今回の蒼天祭では、本学を訪問なされた地域の人々もかなりの数に上り、また各模擬店やイベントにも、予想を越えるお客様が来られたようで、全体的に見れば、やはり大きな成果を収めた大学祭であったと感じられた。

一日の土曜日は、あいにく朝から小雨まじりでやや寒く、お天気には恵まれない大学祭の初日になってしまった。模擬店を経営し、多数の来客を期待した学生たちには、とてもかわいそうな気持ちでしたが、それでも、地域の小学生や教職員のご家族の方々が、ある程度来てくれたので、学内での各ゼミナールやクラブおよび教職員の展示室は、それなりに賑わっていたような印象を受けた。体育館では、開始時間を少し遅らせながら、企画した各種のイベントを淡々と進めていた。私は、フードバトルのみを見学したが、プロのディスクジョッキー兩名の名司会のもとで、学生たちが早食い競争の熱戦を繰り広げていた。フードバトルでは、この蒼天祭の実行委員長である菊池君が、最初から最後まで、豪快な食いっぷりで見事に優勝した。本人には、誰かに優勝を譲らなければという謙虚さもあったようだが、わざと力を抜くより、闘志をしっかりと出して奮戦した彼の人柄のまじめさを、第一に称えたい。

二日の日曜日は、昨日のかたきを取るかのようになり、大変良いお天気になり、気温も上がり、お祭りムードも、ぐっと高まってきた。この日の圧巻は、やはり屋外の中庭に設営したメインステージで開かれた、よさこいソーラン祭りの大乱舞であろう。このよさこいソーラン祭りは、二年前から実施しているが、地域の人々をたくさん呼び集めるイベントとして、蒼天祭には欠かすことのできない、画期的なアトラクションになってきた。ただ最初は、地元小学生の団体が用意した曲がうまく流れないというアクシデントもあったが、その後は、何とか無事に演舞を予定通り進行させてい

た。本学の蒼天祭のために、わざわざ来て頂いた野幌若葉小、江別まっことええ、札幌学院大学、浅井学園大学、武蔵女子短期大学、天下一品などの諸団体の皆様には、心から感謝を申し上げたい。とにかく、参加なされた諸団体は、それぞれ持ち味を出して、素晴らしい踊りと元気な振りつけを熱演し、本学の蒼天祭を大いに盛り上げて下さった。本当に、ありがたいことであった。

また今回は、参加された団体の人たちにも、模擬店の食券などを配付したのだが、彼らが模擬店を積極的に利用してくれたので、中庭の会場は、まさにお祭りの縁日のような雰囲気になった。模擬店の学生諸君も、ひっきりなしに来られるお客様への対応で、汗だくだったようである。松尾記念館講堂で開催されたライブのイベントも、おおむね好評を博し、観客も多かったと聞いている。夕方からは、メインステージで大抽選会も行われ、かなり良い景品が当たる期待もあったのか、地元の方々が多数残って下さり、抽選のたびごとに、大きな歓声を上げていた。今回の蒼天祭には、小学生が多く来たせいか、児童らの保護者も付添いで来校なされており、その方々が抽選会で、運良く素晴らしい景品も手に入れて、親子共々で、とても感激した嬉しそうな姿を見せていた。この点に関しては、本学も地域の人々のために、少しは暖かいサービスと貢献ができたように思える。今後も、このような工夫と配慮を積み重ね、地域の人々との交流を深めてゆければ、本学も、必ず地域の人々に愛される魅力的な大学として、着実に発展していけるのではないだろうか。

最後になりますが、この蒼天祭の開催のために、本当に長い間、献身的にご尽力とご奉仕を下さった実行委員会の学生諸君には、心から敬意と感謝を申し上げます。企画や運営に全力で携わった学生諸君には、きっとかけがえのない充実感と達成感が残ったことと確信致します。また、二日間にわたり、色々とご協力とご支援を下さった本学の教職員の皆様にも、衷心より、厚くお礼申し上げます。

第17回 蒼天祭

2005.10.1~2



委員長 菊地 貴之

『蒼天祭』を終えて

まず、第17回『蒼天祭』が無事開催でき、何事もなく終了できましたこと報告いたします。また蒼天祭活動期間中には、大学関係者はじめ様々な方たちにご協力いただき、心よりお礼申し上げます。

今年度の『蒼天祭』は1日目に天候が雨のため客足が伸びませんでしたが、2日目は晴天に恵まれ両日で延べ1500人の来場がありました。

実行委員会より

私は今回の活動で、今までの自分で企画立案して動く一委員としての仕事ではなく、企画内容の最終的なチェックをしたり、委員会内の統括を取ったり、大学に協力をお願いに行ったりといった、委員長としてやるべき仕事の多さとそれらの責任に押しつぶされそうになることもありました。しかし、仲間の存在はやはり大切なもので、仲間を支えられたからこそ私は委員長の仕事が全うできたと思います。そして、私は今『蒼天祭』を終えて達成感と自信を得ることが出来ました。

私が実行委員会に入り、2年半が過ぎました。その間に辛く厳しい経験もしてきました。ですがこの経験は間違いなく今後の糧となると思います。

すでに来年度に向けて実行委員会は動き出しています。これからも実行委員会の活動にご理解・ご協力いただけますようよろしくお願いいたします。皆様、本当にありがとうございました。



企画部長 須藤 一弘

実行委員会より

今年の大学祭は、例年にはなかった企画を取り入れて、ある意味で実験的な企画を織り交ぜた大学祭にしてみようといった考えで行ないました。そのため大変なことも多々ありましたが、多くの人たちの支えによって、その企画は何とかやり遂げることが出来ました。特に、AIR-Gと協力して作り上げたso-ten Liveは、昨年とは比べ物にならないくらいの成功を収めることが出来ました。本当に大変でしたが、とても楽しかったです。今回企画の運営に関わった大学職員の皆様、大学教授の皆様、広告協賛を頂いた企業様、AIR-G関係者様、その他多くの方々に心より御礼を申し上げます。



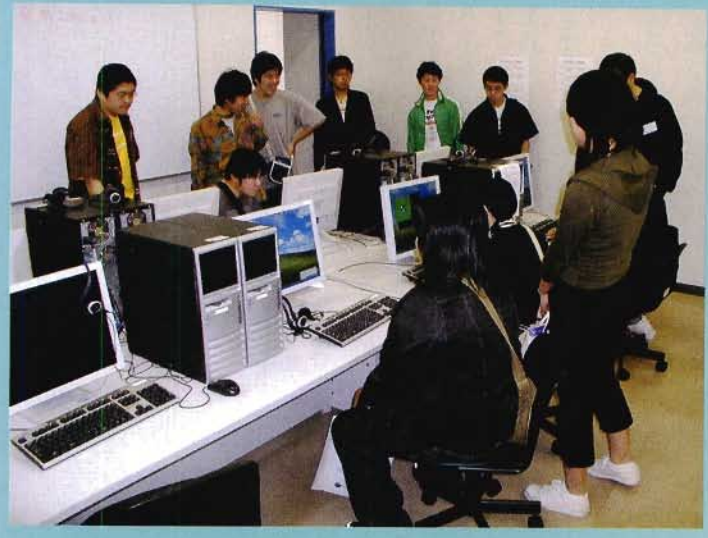
第19回
蒼天祭
2005.10.1~2



広報部長 千葉 祐明

実行委員会より

10月2・3日に渡り情報大学で学園祭「蒼天祭」が行われました。私たちはそれに備え夏休み前から準備をしてきました。私は広報部で主にパンフレット作成に携わりました。今年は去年より出来のいいパンフレットを作ることができたと思います。蒼天祭当日にパンフレット片手に各模擬店、ゼミなどを回るお客さんを見ることができて嬉しく思いました。来年は今年よりも多くの人に来ていただけるよう努力したいと思います。特にお世話になった学生サポートセンターの方々ありがとうございました。



出展部長 木村 康孝

実行委員会より

今年の蒼天祭は、模擬店の数が昨年より少なかったものの、いつも通りのにぎわいを見せていました。模擬店では、お好み焼きやたこ焼きなどお祭りでおなじみのものから、豚汁やおしることいったメニューまで色々なものが販売されていました。初日は雨が降ったため、人の入り具合は少なめでしたが、二日目は盛況だったようです。

展示のほうは、今年は多くのゼミが展示を行ないました。蒼天祭に来た人たちやオープンキャンパスに来た人たちに、日ごろ情報大学でやっている研究などを見せることが出来てとても良かったと思います。また、作品を募集して展示を行った、趣味の部屋やフォトコンテストも良かったと思います。

これからも、模擬店や展示を充実させて、蒼天祭を盛り上げていければと思います。



谷口ゼミではとくにこちらからテーマ設定をするということはありません。学生は自由にテーマを選択してよいことになっています。

3年の前期では、個々に選んだテーマの新規性



や自身のアイデアというものよりも、発表資料の書き方や、発表の仕方に重点を置いてゼミを行っています。後期からは卒論に向けたテーマを検討

してもらいます。同時にPowerPointを利用した発表を始めます。4年次から、決定した卒論のテーマに沿って毎週進捗報告をしてもらい、ある程度進んだと(こちらが、または学生が)判断した場合には、資料を作成・報告してもらっています。

プログラム言語などのコンピュータ関連の講義や演習を受け持っている関係上、プログラミングに興味のある学生はある程度いるのですが、たんに興味があるというだけでは、プログラムを作成するのはなかなか難しいようです。3年の途中まではプログラムをいくつか作ってくる学生もいますが、最終的に卒論となると、きちんとプログラムを作り終えたという学生はほとんどいません。プログラムするのに楽しい環境(AIBOやPSP、Ruby on Railsなど)をいくつか用意しているので、プログラミングをしてみたい学生に来ていただけたらなあと思っています。



紹介ゼミ

谷口ゼミ

集田ゼミ

4年 藤田 祐司

我が集田ゼミは大学院生1名、四年生10名、三年生12名で構成され、先生を合わせた24名で活動を行っています。この大人数で机を囲み議論を交わす、それは大変賑やかな風景が想像されますが、毎週提出されるレジュメに対する3年生、4年生、そして先生からの厳しい質問、それに答えられなかった時の沈黙、そこには厳しさがあるのです。

研究テーマはその人の考えが尊重され、それは自由と言っても良いでしょう。しかし研究テーマを自分で決めたからには、しっかりと「ゼミ以外」の時間で研究を進めなくてはなりません。ここに集田ゼミの大きな特徴である自主性を重んじる精神が宿っているのです。

新3年生向けの集田ゼミ説明会、HTML講習会、基本情報技術者試験講習会、そして今後は4年生が3年生に向けての就職苦労話説明会も行われる予定です。

体育祭ではソフトボール第3位の成績を残し、蒼天祭オープンキャンパスでは高校生の皆さんによるアンケートで「興味を持ったゼミ」第1位に

輝きました。頑張った分だけ成果が返ってくる、それがゼミ訓であります。

一人一人が考え、行動することでゼミは活発になり、それは大学生活をより一層実りあるものにするのではないのでしょうか。「厳しさの中の充実感」、私が集田ゼミを一言で紹介するならば、この言葉を皆さんにお届けしたいのです。

さあ、私の手元にレジュメが配られました。3時間にも及ぶ長いゼミの始まりです!

集田研究室URL

<http://www01.do-johodai.ac.jp/~nhayata/>



ダブルダッチ同好会

部長 佐藤 憲昭



ダブルダッチ同好会は2003年にダブルダッチ同好会として設立され、まだ日の浅い同好会です。ダブルダッチを広めるために日夜励んでおります。

ダブルダッチとは2本の縄を使った縄跳びのことで、縄の中でダンス的な飛び方をしたり、アクロバットな飛び方をしたりするスポーツです。現在の私たちの活動内容は、今年の春ダブルダッチ同好会の7人でHOLY COWというチームを作りダブルダッチの普及活動を行っております。

今年の活動は7月に4番街祭りという札幌のお祭りに参加しダブルダッチパフォーマンスを行いました。そのほかにも高校生などにダブルダッチを教え、夏にはダブルダッチ同好会から私を含め5人もの部員がアメリカ短期留学をし、サンタクルーズやサンフランシスコでも拍手喝采をもらいました。そして秋には情報大の蒼天祭はもちろん



藤女子大学で

のこと藤女子大学の花川校や北十六条校の学園祭や江別市の「世界市民の集い」というイベントでも行ってきました。このように札幌や江別などのイベントに参加しパフォーマンスを行うだけではなく、ほかにも高校生や小さい子供、さらには大人の方へとあらゆる年代の人にダブルダッチ講習を行いダブルダッチの面白さを伝えております。

ダブルダッチパフォーマンスを行ううまくいったときや拍手をもらったときなどの感動は忘れられません。私たちは何もないところからどうやったらお客さんが楽しんでくれるかを考え、ひとつのパフォーマンスを作り、さらには音楽などもそのパフォーマンスに合うよう編集をしてひとつのデモを作ります。そして人前パフォーマンスを行うことによって度胸なども身に付き、将来的に役立つことも多いと思います。

最後にダブルダッチ同好会はほかの運動部と違い大会などが無いのでナンバーワンを目指すことはできないのですが、「ダブルダッチの楽しさや面白さ」を多くの人々に伝えることはできると思います。見てくださる一人一人のオンリーワンになれるよう頑張ります。



江別市の「世界市民の集い」で

学 生 サ ポ ー ト セ ン タ ー よ り

■平成17年度 保護者と教員との懇談会

平成17年8月27日(土)3学年生、10月22日(土)1学年生の保護者を対象に「保護者と教員との懇談会」を開催致しました。

この懇談会の目的は、本学の教育方針や現況をご説明申し上げ、保護者の皆様との連携を深めることにより、学生に対する教育効果を一層高めようというものです。

3学年生の保護者懇談会については、先ず本学の教育目標及び現状について井野学長から説明を致しました。次に、立花就職部長より就職指導の基本的な考え方、本学の就職支援体制、就職指導スケジュール、求人動向、就職活動上の留意事項等就職に関しての詳細な説明を致しました。その後、教員が保護者の皆様と個別にお会いし、学生の学習状況等について懇談を致しました。あわせて、学生サポートセンター事務室において、就職

相談コーナーを活用して保護者の皆様に個別の相談等に応じました。

1学年生の保護者懇談会については、井野学長から本学の教育目標及び現状を説明し、次に、加藤教養主任より、高校までの授業と違い単位制であること、3学年への進級は2学年終了時点で56単位以上修得していること、卒業見込み証明書の発行は3学年終了時点で100単位以上修得していること、4年間で126単位以上修得することが卒業の要件であること(内訳は下表のとおり)、これらを総合すると1年間で40単位程度を修得するようとの単位修得目標について詳細な説明を致しました。引き続き加藤教務課長より出席状況の管理、保護者の方への連絡、成績表の見方、先輩学生が後輩の相談を受けるピアサポートルームの利用について説明を致しました。その後、教員が個別に学生の修学状況、講義の出欠状況、成績等について保護者の皆様と面談を致しました。

科 目 区 分		卒業に必要な単位数
基礎技法科目	技法1	14
	技法2	8
情報社会の人間教育科目	情報社会と科学	2
	人間・社会・自然・総合	22
専 門		80
合 計		126

3学年生の保護者の皆様および教員



立花就職部長の説明

◆就職内定状況（平成17年10月31日現在）

事 項	経営情報学部				情報メディア学部		合 計	
	経営学科		情報学科		情報メディア学科			
	全体	内(女子)	全体	内(女子)	全体	内(女子)	全体	内(女子)
在 籍 数	81	8	113	8	188	24	382	40
卒業予定者	79	8	111	8	184	24	374	40
就職希望者	63	6	95	8	149	21	307	35
内 定 者	46	6	63	5	101	9	210	20
内 定 率	73.0%	100%	66.3%	62.5%	67.8%	42.9%	68.4%	57.1%

◆国際交流センターをリニューアルしました

かねてより行っていた国際交流センターの改装工事が完了しました。これにより、バス・トイレ・ミニキッチンなどが完備された学生の宿泊施設が

完成しました。今後、必要な什器を整え、平成18年4月より新入生を受け入れる予定です。



写真 上 : 建物外観
 右上 : 宿泊室(机)
 右下 : 談話コーナー

◆◆ 教職員の動向 ◆◆

《職員》

採用(10月1日付) 広報室 川村 弘司

◆◆ 主要行事(7月2日～11月1日) ◆◆

◇法人本部◇

9月20日(火)～22日(木) 監査法人トーマツ「平成17年度期中監査」

10月11日(火) 理事会

◇大学院◇

8月29日(月)～9月8日(木) 大学院入学試験(一次募集)出願受付

9月17日(土) 大学院入学試験(一次募集)

21日(水) 一次募集合格発表

29日(木) 研究科委員会

◇大 学◇

7月 2日(土) 公開講座「第5回 体験! ホームビデオ編集」

4日(月)～8月2日(火) 江別商工会議所主催 パソコンセミナー

6日(水) 臨時全学教授会

6日(水)～16日(土) 南京大学からの日本文化研修旅行

8日(金) 経営情報学部教授会

9日(土) 公開講座「発表会 体験! ホームビデオ編集」

公開講座「文化から見た日本と世界(1)」

外部行事「トライ☆アス☆カル」支援

15日(金) 情報メディア学部教授会

16日(土) 公開講座「文化から見た日本と世界(2)」

外部行事「トライ☆アス☆カル」支援

22日(金) 全学教授会

24日(日) A O入学試験(A日程)第一次面談(本学会場)

25日(月) A O入学試験(A日程)第一次面談(帯広会場)

26日(火) A O入学試験(A日程)第一次面談(釧路・函館・東京会場)

26日(火)～8月3日(水) 前期定期試験

27日(水) A O入学試験(A日程)第一次面談(北見会場)

28日(木) A O入学試験(A日程)第一次面談(旭川会場)

外部行事「トライ☆アス☆カル」支援

30日(土)～31日(日) 公開講座「コンピュータで暑中見舞いを作ろう」

8月 5日(金) 高校教諭HIJ見学会

22日(月)～26日(金) 公開講座「ゆっくりのんびりWorldに挑戦」

27日(土) 保護者と教員との懇談会

29日(月)～9月2日(金) 中学生職業体験受入れ

9月 5日(月)～7日(水) 前期追試験

8日(木) 特別講演会「ソフトウェア業界における特許権」

9日(金) 経営情報学部教授会

15日(木) 理事長と教員の夕食会

15日(木)～17日(土) 前期再試験

16日(金) 情報メディア学部教授会

17日(土) えべつものづくりフェスタ出展

19日(月) A O入学試験(B日程)第一次面談(本学会場)

20日(火) 後期開講

25日(日) A O入学試験(B日程)第一次面談

(旭川・帯広・北見・釧路・函館・東京会場)

26日(月) ピアサポートルーム開設

30日(金) 全学教授会

10月 1日(土)～2日(日) 蒼天祭

4日(火) ハラスメント防止啓発講演会

7日(金) 情報処理学会北海道シンポジウム2005

8日(土) 公開講座「デジタルカメラで写真を楽しむ」

12日(水) 公開講座「第1回 プログラミング入門-Java-」

14日(金)～15日(土) 北海道情報大学 国際フォーラム'05

15日(土) 情報メディア学部三年次編入学試験

公開講座「第2回 プログラミング入門-Java-」

19日(水) 公開講座「第3回 プログラミング入門-Java-」

21日(金) 経営情報学部教授会

情報メディア学部教授会

22日(土) 公開講座「第4回 プログラミング入門-Java-」

ふるさと江別塾

23日(日) A O入学試験第二次面談

保護者と教員との懇談会

26日(水)～11月1日(火) MOS講習会(Excel)

28日(金) 全学教授会

29日(土) 同窓会講演会及び懇談会

11月 1日(火) 北海道野幌高等学校との高大連携に関する協定調印式

◇通信教育部◇

7月25日(月) 新潟教育センター大学見学

◆◆ 広報活動 ◆◆

<北海道情報大学通信教育部 入学説明会;本学独自>

7月:7会場(福岡、東京、名古屋、大阪、札幌、帯広、釧路)

8月:3会場(北見、旭川、函館)

9月:2会場(東京、本学)

<北海道情報大学通信教育部 合同入学説明会;私大通教主催>

8月:3会場(大阪、福岡、名古屋)

9月:2会場(東京、札幌)

<進学相談会>

8月:北海道9会場(札幌(2)、小樽、苫小牧、室蘭、函館、旭川、北見、釧路)

9月:北海道1会場(帯広)

青森県2会場(青森、八戸)

岩手県1会場(盛岡)

秋田県1会場(秋田)

<高校内ガイダンス>

7月:北海道9校(札幌東豊高校、札幌龍谷学園高校、クラーク記念国際高校(本校)、武修館高校、北海高校、札幌白陵高校、旭川大学高校、美幌農業高校、北海学園札幌高校)

8月:北海道1校(札幌真栄高校)

9月:北海道1校(旭川凌雲高校)

10月:北海道1校(北海道栄高校)

<高校出張授業>

9月:北海道1校(本古内高校)

<オープンキャンパス>

7月30日(土) 本学

31日(日) 本学

8月 5日(金) 帯広、釧路、北見、旭川、函館

9月 4日(日) 本学

10月 2日(日) 本学

<A O入試説明会>

8月 4日(木) 本学

<新学科(医療情報学科)入試説明会>

8月28日(日) 本学

9月 4日(日) 本学

<推薦入試説明会>

9月 4日(日) 本学

<広報室来学者>

7月 6日(水) 星槎国際高校(教員1名)

12日(火) 松風塾高校(教員2名)

15日(金) 星槎国際高校(教員2名)

9月13日(火) 石狩翔陽高校(上級学校見学会:学生34名、教員2名)

22日(木) 南幌高校(大学見学会:学生55名、教員2名)

29日(木) 南幌高校(大学見学会:学生27名、教員2名)

30日(金) 野幌高校(学校見学会:学生24名、教員1名)

30日(金) 白樺学園高校(教員2名)

10月18日(火) 江別高校(大学見学会:学生255名、教員9名)

25日(火) 江別第二中学校(総合学習:学生9名)

◆◆ 主な来学者 ◆◆

7月 7日(木) 南京大学 日本文化研修旅行一行(学生19名、引率者3名)

10月14日(金) 南京大学 陳道蓄教授、潘金貴教授

編集後記

7月にオール南京大学から19名の学生が日本文化研修のため来日し、11日間滞在した。中国の一人っ子政策で育ったので、さぞ我がままで生意気な学生をイメージしていたが、実際は、一人ひとりとても素直で、好奇心に富み思いやりのある好青年達だった。期間中ぎっしりのプログラムをこなし、大いに食べ・笑い、日本の旅を楽しみ、帰国に当たって本学関係者と涙の別れがあったと聞く。国レベルでは微妙なところがあるが、民間の交流で、相互親善をより深めたいものである。(風)